



Title	「お酒は20歳から」の根拠を探る
Author(s)	村上, 道夫
Citation	現代化学. 2026, 661, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104945
rights	©2026 東京化学同人
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

基準値/をカガクする

第 88 回

「お酒は20歳から」の根拠を探る

村 上 道 夫

世の中には、安全や健康などにまつわるさまざまな基準値がある。環境や食品中の化学物質、健康診断のように日々の暮らしのなかで目にするものもあれば、災害やパンデミックといった危機的状況において初めて耳にするような基準値もある。基準値を超えた、超えないといったことを見聞きすることはあっても、その根拠まで知っている人は、そう多くはないのではないだろうか。一方で、近年では性別が単純に男女という二つに分けられるものではないという認識が広がってきたように、社会は多様性を重視し、ボーダーレス化が進んでいる。そのようななかで、どのように基準値で線引きを行うかという問題には、難しさだけでなく、純粋なおもしろさもある。

本連載「基準値をカガクする」では12回にわたって、社会のさまざまな場面に存在する「基準値」がどのような経緯で定められてきたのかを紹介していく。私と永井孝志氏（農研機構 農業環境研究部門）が交代で執筆を担当する予定である。

私たちはこれまで、小野恭子氏（産業技術総合研究所）、岸本充生氏（大

阪大学）とともに、基準値をテーマとする書籍を刊行してきた（文献1,2）。本連載で扱う話題の一部は、それらの書籍と共通する内容もあるため、興味のある方はぜひ参照されたい。

「お酒は20歳から」の謎

第1回のテーマは、飲酒の基準値である。「お酒は20歳から」という言葉に含まれる「20歳」は、いったいどのように決められたのだろうか。飲酒年齢の20歳は、「基準値の数字は知っているが、その根拠は知らない」という状況を象徴する典型例であろう。

飲酒が健康に望ましくない影響を及ぼすことは広く知られている。特に成長過程にある子どもでは、アルコール分解能力が未熟なため、臓器への影響が大きくなりやすい。しかし、19歳から20歳になった瞬間に分解能力が成熟するわけではない。なぜ18歳でも19歳でも21歳でもなく、「20歳」なのだろうか。

「お酒は20歳から」というルールが法的に定められたのは、1922年制定の「未成年者飲酒禁止法」による。この法律では、成年に達していない者の飲

酒が禁止されており、当時の成年年齢が20歳であったことから、飲酒年齢も20歳とされた。すなわち、飲酒年齢の根拠は、健康科学的な線引きというよりも、法制度上の自立年齢に基づいていたのである。

しかし、ここで話を終えてはならない。次に問うべきは、なぜ（当時）成年年齢が20歳と定められたのか、という点である。この問いは、1876年の太政官布告にまで遡る。当時の欧米諸国では成年年齢を21～25歳程度とする国が多かったが、それと比較して、①日本人の平均寿命が短かったこと、②精神的成熟が比較的早いと考えられていたことなどを総合的に勘案し、成年年齢は20歳とされた。たとえば当時の平均寿命は、欧米諸国が概ね50歳前後であったのに対し、日本は40代前半であった（文献3）。お酒が20歳からとされているのは、この成年年齢の数字が使われ続けてきた結果なのである。

こうした経緯を踏まえると、2022年の民法改正で成年年齢が18歳に引下げられた際、飲酒年齢も変更されてもよさそうに思える。実際にはそう

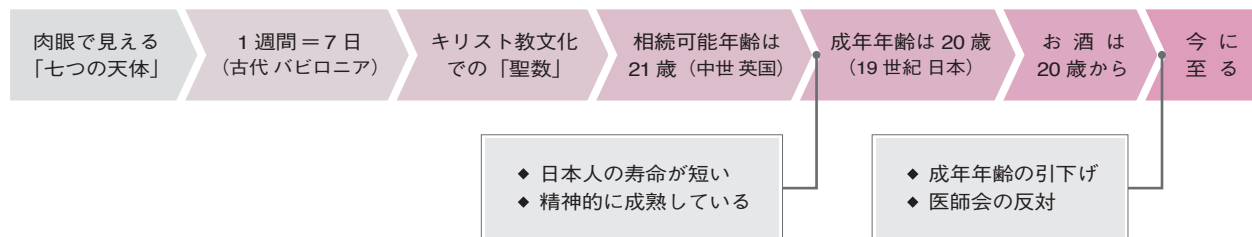


図 飲酒の「20歳」のルーツ

ならなかったが、そこには経緯がある。2015年、自民党の「成年年齢に関する特命委員会」は、飲酒および喫煙の禁止年齢を18歳未満に引下げる提言を検討していた。しかし、日本医師会などから健康影響への懸念が示され、飲酒年齢に関する議論は賛否が分かれた。結果として、「未成年者飲酒禁止法」は「二十歳未満ノ者ノ飲酒ノ禁止ニ関スル法律」と名称のみが変更され、内容は維持されたままとなっている。

なぜ英国の成年年齢は21歳だったのか

ここまでで「お酒は20歳から」という基準の直接的な根拠は見えてきたが、なお一つ謎が残る。それは、19世紀後半の欧米諸国が、なぜ成年年齢を21～25歳としていたのか、という点である。法務省のウェブサイトには各国の成年年齢や変更理由が整理されているが、「なぜその数字なのか」という問いに明確に答えているわけではない（文献4）。

たとえば、英国ではかつて成年年齢が21歳であったが、その由来の一つとして、13世紀に騎馬用の重い防具を身につけて戦える年齢が21歳であったという説がある。また、西欧諸国の封建制度下では、土地や財産を管理できる年齢として21歳が採用され

ていた。21歳という数字の背景には諸説あるが、中世ヨーロッパでは人生の節目を「7の倍数」で捉える考え方があったともされる。「7」という数字は、キリスト教文化において聖数として特別な意味をもってきた。さらに、「1週間＝7日」という概念は、古代バビロニアにおける、肉眼で観測可能な七つの天体（太陽・月・火星・水星・木星・金星・土星）に由来するとされている。

すなわち、「お酒は20歳から」という日本の飲酒年齢のルーツをたどると、最終的には肉眼で見える天体に行き着く（上図）。数字が玉突きのように使われ続けてきた歴史そのものが、基準値を考えるうえで示唆的である。

基準値の四つの特徴

最後に、飲酒年齢の「20歳」という基準値を例に、基準値一般にしばしば見られる特徴を四つあげておきたい。

① **従来型の科学だけでは決められない**
飲酒年齢に法制度上の自立年齢という意味合いがあったように、基準値の設定には社会的背景が関与する。

② **数字を使い回してしまう**
既存の基準値を前提に新たな基準が定められることは多く、その際、もとの根拠が十分に検討されないまま踏襲されることもある。

③ **一度決まるとなかなか変更されない**
成年年齢が変更されても飲酒年齢が維持されたように、基準値は厳しくすることも緩めることも容易ではない。

④ **法的な意味はさまざまである**
基準値には、法的拘束力の強いものもあれば、目標値や努力義務のように拘束力のないものもある。数字だけでなく、その運用にも目を向ける必要がある。

次回以降に紹介する基準値にも、これら四つの特徴が当てはまるものが多い。そうした点を意識しながら、基準値の世界に関心をもっていただければ幸いである。

参考文献

1. 村上道夫, 永井孝志, 小野恭子, 岸本充生 著, 『基準値のからくり——安全はこうして数字になった』, 講談社 (2014)。
2. 永井孝志, 村上道夫, 小野恭子, 岸本充生 著, 『世界は基準値でできている——未知のリスクにどう向き合うか』, 講談社 (2025)。
3. 法務省, <https://www.moj.go.jp/content/000012404.pdf> (2026年1月14日閲覧)
4. 法務省, <https://www.moj.go.jp/content/000012471.pdf> (2026年1月14日閲覧)

本連載は、村上道夫（大阪大学）と永井孝志（農研機構）が執筆を担当する。